

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字

2

FEBRUARY 2021 NO.969

NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS
<http://www.jrc.or.jp>

令和3年2月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第969号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可



わたしも赤十字

寄付の協力者

輿水政直 (こしみず・まさなお) さん【p.4でご紹介】

特集 第3波に立ち向かう コロナ病棟最前線

人間を救うのは、人間だ。



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society



第3波に立ち向かう コロナ病棟最前線

新型コロナウイルス感染症の強烈な第3波が全国に襲いかかっている。第1波、第2波と比べ感染傾向はどのように変化したか。そして医療の逼迫もささやかれる中、医療従事者の身に何が起きているのか。新型コロナウイルス専用病棟の最前線をレポートする。

命が消える、最期のときに家族に会えない …新型コロナとの戦いは「人道」の問題だ

第1波、2波と経験を重ねることで わかってきた新型コロナとの戦い方

新型コロナウイルス感染症の指定病院として、初期からコロナ患者の対応に当たってきた東京の武蔵野赤十字病院。武漢からのチャーター便や横浜のクルーズ船の陽性患者を収容し、第1波のピーク時には重症者が70人超、人工呼吸器をつけた症例が33例ほどあった。当初は有効な薬も不明な中、新型コロナウイルス感染症という未知の病と戦い続け、その中で見えてきたことがある。接触と飛沫感染、そして換気。この3つの対策をしっかりとやれば、感染コントロールができるということだ。事実、感染疑いの患者や陽性と判明している患者と接している救急外来の職員は、これまでの間、一人も感染せず、施設を閉鎖することなく治療を続けている。

感染流行の第3波が到来し、救命救急科の医師・原田尚重部長と救命救急センターHCU(高度治療室)の宮本加奈子看護師長が口をそろえて言うのは、第1波のときより高齢の患者が増え、同じ重症患者でも重症度が高くなっている、ということだ。

重症患者の増加に伴い、より負荷のかかる看護業務に進化する新型コロナウイルス専用病棟(以下、コロナ病棟)のスタッフたち。同

病棟の古澤恭子看護師長に頭から離れない光景は、とたずねると、第1波の最中、初めて新型コロナウイルスで亡くなられた患者さんをお見送りした時のことを振り返るように話してくれた。

「ご遺体は滅菌のバイオシールに包まれてお顔も見えず、ご家族も会えない。亡くなられたのは3人の息子をもつお母さんで、せめて出棺する車を院外で見送れるよう、車が出る時刻と通る場所をご家族にお伝えしました。家族にとってもつらい別れですが、その方を看護していたスタッフも、とても切ない思いをしました。患者さんにもっと寄り添ってあげたいし、お見送りの時ぐらいいは患者さんとご家族を会わせてあげたい…でも、それが許されない。災害時とも言える状況下で、この『看取り』のストレスは大きく、コロナ病棟の看護師の心を守るためにも、お見送りの方法を考える必要がありました」

「最期のときに家族に会えない。これは医療の領域を超え、人道の問題だ」と断言するのは、原田部長だ。「最後まで手を尽くすのは医療の責務。その先、家族に会えないまま茶毘に付されるのは人間の尊厳に関わる人道の領域として、立ち向かわなくてはならない」。武蔵野赤十字病院では、防護服に在庫の不安があっても、お見送りの際に家族に防護服を提供してお別れの機会を設けるよ

うになった。また、亡くなるかもしれない患者さんには、5分だけでも家族が会える体制を整えた。

実際に病室に入ったご家族から「本当にいい時間を作っていたいただいた」と感謝の言葉ももらい、スタッフも励まされたという。

もちろん、これらの対応は感染制御チームと調整して行う。その背景には、第1波、第2波と経験を積み重ねた現場の知見が生きた。

医療だけでなく、全ての人に まだまだ、できることはある

原田部長は現在の状況をこう指摘する。「自宅待機中の陽性者が急激に悪化して救急車で運ばれるケースが増えている。このパターンが増え続けていくのは良くない」。原田部長は、市中感染が広がっているなかで、病院以上に行政(保健所)が疲弊しており、濃厚接触者や感染者の精査に関与できなくなっているのではないかと危惧している。ただし、原田部長自身は医療が逼迫しているとは考えていない。1年たって分かってきたことも多く、工夫の余地があるからだ。設備がなくとも現場で知恵を絞って工夫して医療に当たることが、救急医療の真髄。救急医療のエキスパートである原田部長の「まだ、できることはある」という言葉は重い。

原田部長は救急病院として重症患者を受け入れるために出口戦略の重要性を強調する。

現在、発熱や味覚障害など新型コロナウイルス感染症の症状が表れてから10日(重症者は20日)たち、かつ平熱になり、呼吸器系の症状が治まるなど医師の判断で回復が認められれば周囲に感染しないということがわかってきた。したがって、そのような患者は一般病床での受け入れが可能となる。東京都には約10万床のベッドがあり、

新型コロナの患者を収容していない医療機関がその1割(1万床)程度でも受け入れ、うまく連携・運用できればキャパシティはまだまだあるはずだと、原田部長は言う。

「現場の医療従事者は医療崩壊などと絶対に言えないし、言うべきではない。新型コロナウイルスの正体もわかってきた今、過剰に恐れることなく工夫を重ねていけば、必ず乗り切れると信じています」

「我慢しています、でも、今にも叫び出しそうになるんです…」

コロナ病棟には、そう本音を吐露する看護師がいる。古澤看護師長は「使命感だけで働き続けるには限界があります」と、部下である看護師たちの疲労に胸を痛める。「4月から“今は災害時よ”、とスタッフを鼓舞してきました。でも終わりの見えない戦いが続く中で、耐え切れなくなっている者も出てきています」。日々、感染予防に神経をとがらせ、家と病院を往復する自粛生活を続ける看護師たちは、時にはメディアの報道にも心が折れそうになるとか。「マスクをしないで繁華街で集まっているとか。そういう報道にも看護師たちは傷つくんです。社会全体で、感染予防のためにできることは、まだある、と思います」

猛烈な感染拡大となった今、最前線の医療従事者たちの負担を減らすためにも、我々ができる大切なことは、「基本的な感染予防対策」をきちんと行うこと、なのだ。



患者には高齢者が多く、必然的に介助の必要な方も。治療薬もレベルによって4種の薬を使用し、症状に合わせて一人一人の処方異なるため、管理にも細心の注意を払う



武蔵野赤十字病院 救命救急センター部長
原田尚重 医師

新型コロナウイルス感染症の流行初期より対策にあたり、院内感染防止の徹底に努める。災害派遣医療チーム(DMAT)隊員、日赤災害医療コーディネーターとしても活躍。

最前線からの声①



新型コロナウイルス専用病棟
古澤恭子
看護師長

正月後から患者数が増え、長い自粛生活の果てに入院というストレスもあってか、ひどい暴言を投げつける患者さんもいて、これまで使命感でやってきたスタッフも、かなり心配な状態です。終わりが見えない状況で、いつ割れるかわからないガラスの上を一步步と踏みしめているようで、早急に心のケアが必要です。

最前線からの声②



救命救急センター HCU(高度治療室)
宮本加奈子
看護師長

新型コロナでは75歳以上の高齢者、かつ基礎疾患のある方は人工呼吸器が必要となるケースが多いです。元々体力が落ちている方が一度つけると、一生、外せなくなってしまうリスクもあるので、人工呼吸器を本当に望むかを毎回、確認しますが、ご家族にとってもつらい判断を聞くことになります…。



気密性の高い防護服での作業は冬でも2時間が限界で、全身が汗だくになる。昨夏には1時間半の作業で看護師が熱中症になり、業務中に倒れてしまった。



博愛社を支えた大実業家・渋沢栄一と 日赤創設者・佐野常民の”深い縁”

コロナ禍の今、その生涯が再び脚光を浴びている、日本資本主義の父、渋沢栄一。
「公益」を重視した渋沢と「博愛」を広く世に説いた佐野、二人の出会いと興味深い関係^{ひもと}を紐解きます。

新型コロナウイルスの蔓延^{まんえん}により世界中の人々の生活が一変した今、逆境を切り開き世の中を変えてきた渋沢栄一の生涯に注目が集まっています。

実業界のみならず公共・福祉事業や民間外交などでも指導的な役割を果たした渋沢は、日赤の前身である博愛社時代からの支援者でした。博愛社の創設者である佐野常民が渋沢に直接協力を依頼し、明治13年に社員(会員)に加入、明治26年には現在の理事にあたる常議員になったのです。佐野と渋沢の両者の縁は、慶応3(1867)年に開かれたパリ万博での出会いにさかのぼります。当時の最先端技術や文化に触れ、帰国後は明治維新の荒波を乗り越え、それぞれの立場から日本の文明開化を支えました。

明治41(1908)年に発行された日赤の機関誌には「慈善の話」と題した渋沢の寄稿があり、「パ

リに行った時、パリ市民に声をかけられてチャリティバザーを初めて知った…帰国後しばらくしてから慈善事業をするきっかけになった」「慈善事業に金を出すことをもって、一種の道楽だと思っている」と書かれています。

「人助けをするにも、金が必要。金持ちはその金で何をすることが大切だ」と説いた渋沢ですが、1923年の関東大震災当時、83歳だった彼は全国規模の義援金窓口「大震災善後會」の実質的な企画者として救済活動に打ち込みました。渋沢は国民一人一人の「共感」の結集が大きな力になることを実証。それこそが佐野の赤十字運動の理念と一致するところでした。

「金はそれ自身に善悪を判別する力はない、善人がこれを持てば善くなるし、悪人がこれを持てば悪くなる」と、いかにも福祉に注力した渋沢らしい言葉が残されています。

渋沢を描く大河ドラマが放送開始!

2021年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」(NHK)では、幕末から昭和までを駆け抜けた、渋沢栄一の破天荒な生涯が描かれます。主人公の渋沢を演じるのは大河ドラマ初出演にして初主演を務める吉沢亮さん。大役を射止めた人気俳優の演技にも注目です。



大河ドラマ「青天を衝け」
2月14日スタート!

毎週日曜夜8:00 - 8:45、NHK総合ほか

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。



寄付の協力者

奥水政直 (こしみず・まさなお)さん

山梨県北杜市/48歳/土木工事業社長

誰かを救う活動に、関わっていきたいから

高校時代、ジュースをもらいに行く気軽な感覚で献血をしました。成分献血ならば2週間に1度できますから、気が付けば50回を超え、金色有功章をいただきました。たくさん献血しておいてよかったと思ったのは母が病に倒れてから。がんの治療で化学療法を受け、ひどい貧血に苦しんだ母は何度も輸血に救われました。誰かの献血、そしてそれを届けてくれる赤十字の存在に感謝しました。その時の恩返し、そして誰かを救うことに協力したいという思いで、今は寄付という形で赤十字の活動を支援しています。

私の会社では、AEDがここにあると一目でわかるように看板を設置しています。必要な時に

近隣の方が使えるように。以前、近くの畑でおばあさんが倒れているのを従業員がを見つけ、すぐにAEDを使用しました。しかし、時すでに遅く、救命できませんでした。私も従業員もこういう時のために赤十字で心肺蘇生の講習を受けていたのでとても残念で…。建設業という仕事柄か、いつも頭の片隅では皆さんの役に立つにはどうすればよいかを考えています。あまり知られていませんが、災害時には我々の業界が初動対応することがあります。緊急車両などが迅速に現場へ入れるように、重機を使って除雪したり橋をかけたりするのです。これからも誰かを救い、支えることを実践していきたいと思っています。

寄付するあなたも 赤十字です

日本赤十字社への ご寄付の方法

クレジットカードで寄付



Webサイトからの登録により、クレジットカードでご寄付いただけます。ご寄付の方法は、毎年・毎月・今回のみからお選びいただけます。

身近な窓口から寄付



- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口

詳しくはこちら→



日本赤十字社 寄付

検索

donate.jrc.or.jp/lp/

あなたのアンケートが寄付になる

赤十字NEWSの紙面をより充実したものにするため、読者アンケートへのご協力をお願いいたします。

1 回答につき100円が協力企業*から日赤へ寄付される「寄付つきアンケート」です。アンケートに回答することが「社会貢献」につながります！



*寄付協力：
株式会社文化工房 様

- 所要時間 **3分ほどの簡単なWEBアンケート** に答えるだけで、1回答につき100円の寄付になります
- 寄付はアンケート回答者の **居住地域の赤十字活動** (防災活動や感染予防啓発活動など) に活用されます
- アンケートはお1人様1回まで。先着500人の回答に対し、寄付が行われます
- このアンケートでは **個人情報** の入力などは一切ありません

アンケートへの参加はこちらの二次元バーコードから！

<https://questant.jp/q/T39NTREG>



アンケート回答締切 2月28日(日)

3.11 あれから
10年を生きて

第11回

東日本大震災の発生から2021年3月で10年。3月号まで「3.11」から人生を変えた人々の物語を毎月連載します。

南三陸町、そこで生きる人々の力になるために

公立南三陸病院 前院長 **櫻田正壽**さん

3月11日の午後3時半すぎ、海から400mの距離にある南三陸町・公立志津川病院(後の南三陸病院)に津波が押し寄せた。訪問診療で院外にいた私は、地元の道に詳しい看護師の運転のおかげで津波到達直前に病院に戻ることができ、院内の災害対策本部がある5階まで一気に駆け上がった。

だがそれが、想像を絶する闘いの始まりだった。志津川病院の入院患者は107人。そのほとんどが、65歳以上で寝たきりか、それに近い状態の方。津波警報を受け、停電でエレベーターが動かない中、病院職員は人力で患者を上階へ運んでいたが、病院に避難してきた百数十人の地域住民も共に上階を目指し、階段は人でごった返した。…患者の運搬は、間に合わなかった。70人近い患者を残したまま、5階建ての4階までが、津波にのまれた。病院職員も3人が犠牲になった。

津波は1回ではおさまらず、職員たちは津波が来て引く度に救出に向かうことに。救出中に犠牲になることも考え、自分の腕に油性ペンで名前を書く職員もいた。死力を尽くしても太刀打ちできない事態がある…強い引き潮で電動ベッドごと海に流されてしまう患者が目の前にいても救えない…自分たちの無力さに絶望した。

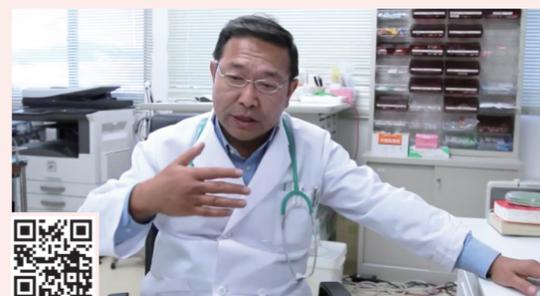
自衛隊が屋上にホバリングしながら救援に来てくれたのは翌日の昼過ぎ。丸2日かけて石巻赤十字病院に全患者が搬送されるのを見送ると、私たちは瓦礫だらけの町へ。それぞれが各地域の救護所に向かうために散って行った。もちろん私も。そこから5カ月間、南三陸町の最後の避難所が閉所するまで、避難所で寝起きしながら仮設診療所で患者を診ることとなった。

救急治療や手術を行える基幹病院を失った南三陸町の人々。1万5千人もの人々がこの町で暮らしていくために、医療はなくてはならない。医療資材が不足し、冷暖房設備もないプレハブの仮設診療所で、重症者は石巻赤十字

病院に搬送して助けてもらいながら、何とかしのいだ。

翌年の春、赤十字を通して寄せられた海外からの支援により2階建ての診療所が、さらに2015年、台湾の赤十字からの救援金によって入院も手術もできる南三陸病院が完成した。喜ぶ人々の顔を見て確信したことがある。心から安心して暮らせる環境を取り戻す、それが復興だ。医療や教育が整えば、震災で町を離れざるを得なかった人々も戻ってくる。最新の医療設備を整えた新病院は、南三陸の人々の見えない力になった。津波で根こそぎ破壊された町は、日本、そして世界の人々にも支えられ、少しずつ息を吹き返していった。

震災後、着の身着のまま脇目も振らずに救護活動を続け、一瞬たりともここを離れてはいけないと考えていたが、1週間ほどたってから一度だけ家に帰らせてもらったことがある。実は家族が仙台にいて、私は単身赴任の身。電話も通じない中、ともかく無事を伝えるために帰ると、ニュースで廃墟と化した志津川病院を見ていた妻や娘たちは私が津波で亡くなったと思っていたらしく、とても驚かれた。再会の歓喜に浸ることなく、すぐに南三陸町に戻ってしまったが。意外だったのは、当時、音大に通っていた娘が医者を目指すと言出したこと。そして彼女は、猛勉強の末に医者になった。南三陸で医療を続けた私の思いを家族は理解してくれたのかもしれない。



櫻田医師のメッセージは日赤公式YouTubeでもご覧いただけます



全国各地 あなたの生活のすぐそばで 日本赤十字社の活動は行われています。

全国 <コロナ禍での赤十字活動> 心のつながりを大切に、今できる「備え」に取り組もう

全国各地に緊急事態宣言が発令され、コロナ禍の深刻な影響が続く中、日赤の各支部・施設では、地域に根ざした活動を続けています。日赤静岡県支部に所属する26の赤十字奉仕団は、前回の緊急事態宣言時に医療資材が逼迫したことから、不足する前の備えとして医療現場で使用する衛生作業用ガウンを作製しようとして一致団結。ビニールガウン約2000枚を作製し、県内の赤十字病院に届けています。大分県支部では、JRC(青少年赤十字)の高校生たちが高齢者に寄り添う活動を行っています。毎年12月末に餅つきをし、独居高齢者につきたて餅を配る活動を行っていますが、感染予防のために今年は中止。高校生たちは、せめてぬくもりのある言葉を送りたいと218通もの手紙をしたためました。手紙を読んだ高齢者から高校生にお礼の返事が届くなど、世代を超えた絆が生まれています。

対面式の活動が制限される中、オンラインによる取り組みも広がっています。11月26日、千葉県成田赤十字病院ではコロナ禍でも災害への備えは欠かせないと、WEB会議システムを使った「大規模災害時対応訓練」を実施。参加者を大幅に減らし、2チームの交代制を導入しながら訓練に臨むとともに、見学者向けに訓練の様子をライブ配信しました。滋賀県支部が開催した、滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山の6支部の青年赤十字奉仕団によるリーダー養成研修会もWEB会議システムを活用。コロナ禍の青年奉仕団の活動について議論し、「医療従事者にリフレッシュしてもらうため、オンラインのヨガレッスンを企画しよう」「孤立した学生をオンラインで癒やそう」と活発な意見が交わされました。コロナ禍で心を分断させる偏見・差別の解消にも赤十字奉仕団は力を入れています。京都市中京区地区赤十字奉仕団は「コロナ禍における赤十字救急法と新型コロナウイルス3つの顔を知ろう」というテーマで救急法の講習を実施。新型コロナによる偏見・差別についてまとめたガイド(日赤編集)を独自に印刷して地域に配布した実績もある同奉仕団は、今回の研修会でも「病気」「不安」「差別」が連なる負のスパイラルをいかに断ち切るかをあらためて議題としました。全国の日赤支部・施設・奉仕団は、感染対策にも細心の注意を払いながら、それぞれの地域で活動を続けています。



静岡県 静岡県内の26の赤十字奉仕団が密を避けながらガウンを作製



大分県 106人のJRCメンバーがお年寄りへの手紙を書いた



千葉県 訓練は震度6程度の地震が発生、停電が起きたという想定



滋賀県 遠く離れた熊本青年奉仕団もオンラインで参加



京都府 人々のつながりが分断されてしまう恐ろしさをあらためて説明

長野県 「新型コロナ対策を支援しよう」 温泉施設が寄付の呼び掛け

日赤長野県支部に白馬村温泉施設連絡協議会から活動資金が寄付されました。この寄付は白馬村内8つの入浴施設が「コロナ禍でも観光客が来てくれるのは陰で頑張ってくれる人たちがいるから」との感謝の思いから、感染予防や差別・偏見防止の取り組み、災害救護活動などへの支援のため、入浴客に呼び掛けて集めたもの。200円以上の寄付には特製温泉タオルがプレゼントされました。



寄付でもらえる、白馬村キャラクターデザインの特製温泉タオル

全国 あなたの気持ちが世界へ届く コロナ禍の「海外たすけあい」

日赤とNHKが実施する「NHK海外たすけあい」が12月25日に終了。38回目となる本キャンペーンでは、これまでに世界159カ国へ支援を届けてきました。今回、新型コロナウイルスの感染者数が少ない地域では感染対策を講じながら街頭に立って呼び掛けを実施、今年のスローガン「助けあわなければ、感染症から世界は守れない」を訴え、多くのご寄付をいただきました。



福井県 福井県では小学生たちも街頭に立って元気に募金を呼び掛けた

神奈川県 子育て中も献血できます！ 奉仕団が献血ルームで託児支援

命を救う献血は「不要不急の外出」ではありません。全国で献血者の減少が続く中、かわさき県献血ルームでは「献血お子様見守りサービス」が始まりました。保育士の資格を持つボランティアと赤十字奉仕団員と一緒に活動しており、利用者に喜ばれています。1月14日、この託児支援を川崎市の福田紀彦市長が視察し、視察後は市長も献血に協力しました。



託児支援は毎月2木曜日に実施(要予約)

長野県 こんな時だからこそ、やさしい気持ちを届けたい！ 入院中の子どもたちに、ぬくもり伝わるクリスマスプレゼント

各地の赤十字病院では、クリスマスシーズンに入院している子どもたちに楽しんでもらう工夫を凝らしています。長野赤十字病院の子どもたちに届いたのは、長野県青年赤十字奉仕団による手作りのクリスマスカード。心温まるメッセージが添えられた約80枚のカードが、病院職員を介して贈られました。千葉県の成田赤十字病院では、12月23日に小児科病棟でクリスマス会を開催。小児科スタッフがトナカイや雪だるまにふんして登場し、サンタクロース姿の角南勝介院長から子どもたち一人一人にクリスマスプレゼントを手渡しました。さらに、院内の音楽部によるコンサートでは「もろびとこぞりて」などのクリスマスソングをハンドベルで演奏。子どもたちも一緒に鈴やカスタネットのリズムを刻んで盛り上げました。

常任理事会開催報告

令和3年1月22日、令和2年度第7回の常任理事会が開催されました。1. 日本赤十字社職員給与要綱等の一部改正について審議の結果、日本赤十字社職員給与要綱等の一部改正については、原案のとおり議決されました。また、新型コロナウイルス感染症にかかる対応、令和3年3月新・防災・減災プロジェクト広報展開、予算の補正にかかる社長専断事項について、それぞれ報告しました。 ※オンラインによる開催となりました。

第97回代議員会開催公告

令和3年3月に新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」において開催予定だった第97回代議員会は新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、開催中止となりました。そのため文書審議をもってこれに代え、下記の事項を付議いたします。 令和3年2月1日

- 記 第1号議案 役員を選出について 第2号議案 令和3年度事業計画について 第3号議案 令和3年度収支予算について



感染対策で居住地域ごとに分散して作業した青年奉仕団のメンバー



「鬼滅の刃」の主題歌も演奏し、子どもたちも大興奮!

「赤十字を応援！」プレゼントA 山之内すず モデル・女優

サイン入り色紙 1名さまに はたちの献血 あい。

はたち代表の私が、献血の必要性を発信していきます！

「はたちの献血」キャンペーンキャラクターに、等身大のはたち代表として選んでいただき、すごく光栄に思います！何より私自身が献血についてたくさん知ることができたので本当に良かったです。年々献血をされる方が減ってきているなか、血液を必要とされている方の数は減ってなくて、まずはこの現状を、新成人を含めた若い世代に知ってもらうことからはじめていくことも大切だと感じています。そこから、ちょっと献血行ってみよう、というテンションで気軽に行けるくらいの感じになるといいなと思っています。このキャンペーンを通じて、もっと多くの方に献血の必要性を知っていただき、少しずつ私の周りからでも、協力の輪を広げていけたらな、と思っております。まずは、一緒に献血のことを知っていきましょう！

やまのうち・すず©2001年10月3日生まれ。兵庫県出身。2019年、AbemaTVの恋愛リアリティーショー「白雪とオオカミくんには騙されない♡」出演を機に芸能界デビュー。以降、同世代から絶大な支持を集め、SNS総フォロワー数は88万人を超える。現在、バラエティー番組のほか映像作品にも出演し、女優としても活躍中。



「赤十字を応援！」プレゼントB パートナー企業紹介 vol.11 青木フルーツホールディングス株式会社 AOKI

フルーツで心を豊かに！幸せになる社会づくりに貢献



地元のマラソン大会「もみやろードレース大会」に協賛し、参加選手にバナナ約1000本を提供。大会を盛り上げるため社員もランナーとして参加しました

「フルーツを通じて、人々の心をより豊かに、体をより健やかにしたい」これが大正13年創業の青木フルーツホールディングス株式会社(以下、青木HD社)が掲げる不変の願いです。東日本大震災で被災した福島県に本社を構える同社だからこそ、災害で苦しむ人々の力になりたいと、義援金の寄付支援にも積極的。熊本地震の際は熊本県果実農業組合連合会へ寄付をし、平成30年7月豪雨の際は発災の翌月には日赤を通じて223万円を寄付しました。人々が幸せになる社会づくりに意欲的に取り組む同社は、日赤への活動資金の支援も毎年行うほか、新型コロナウイルス感染拡大の影響で在庫の停滞や売上減少が顕著な全国の果実農家を応援するため、「#元氣いただきます プロジェクト」にも参加しています。

フルーツマイスターが厳選した季節のフルーツギフト



創業97年、果物を知り尽くした果物屋の匠が鮮度と熟度を徹底管理し、一番の食べ頃でお届けします

当選品は、青木HD社から発送いたします。なお、発送に必要な個人情報は、「個人情報保護契約書」に基づき日本赤十字社から青木HD社へ提供し、当選品発送のためにのみ使用いたします。

上記プレゼント希望者は、右記WEBサイトにてご応募ください。インターネットアクセス 赤十字ニュース プレゼント 検索 応募先 赤十字NEWS 2月号プレゼント係 2月26日(金)必着

WORLD NEWS

コロナ禍の赤十字ボランティア



© Spanish Red Cross

スペインの赤十字ボランティアは、自転車に乗って町中を回り、正しい感染予防の啓発やマスクの配布を行う

“ボランティアは暗闇の中の光” コロナ禍の世界で赤十字ボランティアが急増中

* 2021年1月20日時点

全世界に広がり続けるCOVID-19、その感染者数は9615万人*を超えました。そんな中、赤十字ボランティアの新規参加者数が急増。過酷な状況下で支え合い、COVID-19に立ち向かおうと、世界各地のボランティアが連帯を強めています。

年齢もキャリアもさまざまな人々が
赤十字ボランティアとして立ち上がる

2020年、新型コロナウイルス(以下、COVID-19)のパンデミックが続く中、世界中で30万人近い赤十字・赤新月社ボランティアが新たに誕生しました。アメリカ赤十字社(7万8千人増)、スペイン赤十字社(6万3千人増)、イタリア赤十字社(6万人増)、オランダ赤十字社(4万8千人増)、ケニア赤十字社(3万5千人増)などで記録的なボランティアの新規登録があったほか、COVID-19の感染例が報告されていないツバルでも、130人以上の新規ボランティアが参加しました。

新旧のボランティアは力を合わせ、食料や医療品の配付、患者の搬送、検査や接触者追跡の支援、こころのケア、マスクなど個人防護具の配付、正しい情報の発信など、幅広い活動を行っています。

ウガンダ共和国の首都、カンパラの学生トレイシーさんは、ロックダウンにより学校が休校となった3月にウガンダ赤十字社にボランティアとして参加。「ウイルスから私の地元を守りたいと思い参加しました。感染症予防

や啓発のスキルを身につけ、人々に奉仕することができ、地域社会とのつながりを実感できています」とトレイシーさん。また、アイスランド赤十字社が運営する感染者隔離センターで支援を受け、回復後にボランティア活動に参加した学生のアダさんは「支えてくれた赤十字に感謝し、自分と同じような状況にある人々を助けたい」と語りました。

闇に覆われ、分裂したかに見えた世界
そこに差したボランティアという光

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)のフランチェスコ・ロカ会長は、昨年12月5日の国際ボランティアデーに声明を出しました。

「今年は前例のない人道的なニーズに応え、前例のない人々の優しさを目の当たりにしました。COVID-19によって未来は暗く、世界は分裂しているように見えるかもしれませんが、連帯と平和、地域社会への支援といった行動すべてに価値があります。何百万人もの赤十字ボランティアは、暗闇の中の真の光です。彼らの計り知れない思いやりと勇気に深く感謝するとともに、ウイルスの犠牲になった人々のことを忘れないようにしたいと思

ます」

まさに、ボランティア新時代の幕開けです。

Puoi anche chiamare il nostro numero dedicato 0150151127 dal lunedì al venerdì, dalle 8 alle 12 e dalle 15 alle 18.

In collaborazione con: federfarma

CRI per te!

SERVIZIO DI SPESA E FARMACI A DOMICILIO PER ANZIANI, PERSONE FRAGILI E IMMUNODEPRESSI

chiamate il numero
Numero Verde
800-065510

e concordate con i nostri operatori la consegna a casa tua grazie ai nostri volontari

Il costo della spesa e dei farmaci è a carico del richiedente.

CRI PER LE PERSONE VICINI, OGNI VOLTA CHE VUOI. 800-065510

Croce Rossa Italiana
Comitato di Stato
Comitato di Regione
Comitato di Provincia
Comitato di Comune

© Italian Red Cross

イタリア赤十字社によるボランティア参加を呼びかけるポスター

数字で見えた! 世界で生かされる皆さまのご支援

世界中の災害や紛争から、人々の命と健康を守る日赤の国際活動。皆さまの寄付がどのように世界で役立てられているのかを、数字でわかりやすくお伝えします。

日赤の海外支援で育成されたボランティア数

(2018年4月~2021年3月 ※)

約1万
3100人

※

※上記期間中における実施事業での研修参加者数累計

© IFRC
アフガニスタン赤新月社のボランティア研修の様子

日赤は、自然災害に見舞われた国、紛争被害国、保健衛生環境の改善が必要な国など、世界各地で支援事業を行っています。なかでも、赤十字の活動を最前線で担う地元ボランティアの育成に長年力を入れてきました。2020年はCOVID-19の流行に伴い、活動の中断や変更を余儀なくされながらも、人々に支援を届ける方法を模索しました。

バングラデシュ赤新月社のボランティアは、自身が活動に際し身の安全を守るため、正しいマスクのつけ方や防護服の着脱方法を学び、母子保健活動やこころのケアなどを続けています。

また、2020年にアフガニスタン赤新月社による保健衛生の研修を受けた1680人のボランティアは、村々に出向き、手洗い用せっけんを配布し、正しい手洗いの方法や感染予防の知識を普及しています。厳しい生活を強いられる人々にとってボランティアの活動が大きな支えとなっています。